

ある臨床例・転落

カミュ全集 8

編集／佐藤 朔・高田正明

新潮社版

AC

カミュ全集 8

Œuvres Complètes d'Albert Camus, Tome VIII

Original Copyright EDITIONS GALLIMARD

This book is published in Japan by arrangements with
Gallimard through the Bureau des Copyrights Français

印刷 1973年 4 月 1 日 発行 1973年 4 月 5 日

発行者 佐藤亮一

翻訳者 安堂信也 安藤元雄 菅野昭正 窪田般弥

佐藤 朔 鷺見洋一 田中淳一 森本和夫

装幀者 高松次郎

発行所 株式会社 新潮社 〒162 東京都新宿区矢来町71

電話東京(03)260-1111(大代) 振替東京808

印刷所 二光印刷株式会社

製本所 神田加藤製本所

定価850円

〈乱丁・落丁本はおとりかえいたします〉 Printed in Japan 1973

《目次》

ある臨床例		安堂信也訳	5
転落		佐藤 朔訳	73
著者のことば		佐藤 朔訳	155
〔文芸評論、時事論文、その他小品〕			
『夏』についてのインタヴュー		窪田般弥訳	159
砂漠について		窪田般弥訳	162
コンラート・ビーベル『フランス抵抗作家から見たドイツ』への序文		安藤元雄訳	165
文学と労働		窪田般弥訳	170
アメリカ大学版への序文		菅野昭正訳	175
ロラン・バルトへの手紙		菅野昭正訳	177
ロジェ・マルタン・デュ・ガール		菅野昭正訳	180
一九三六年七月十九日		安藤元雄訳	210
スペイン		安藤元雄訳	217

海外植民地政治犯特赦委員会	における声明	森本和夫訳	218
テロリズムと特赦		森本和夫訳	221
テロリズムと弾圧		森本和夫訳	223
アルジェリアの未来		森本和夫訳	230
ドムナツクへの返事		森本和夫訳	236
自由の旗のもとに		安藤元雄訳	244
ギリシャの子供		安藤元雄訳	248
あるアルジェリアの闘士への手紙		鷺見洋一訳	250
引き裂かれたアルジェリア		田中淳一訳	254
解題			271

カ
ミ
ユ
全
集
8

ディノ・ブツァティ作

ある臨床例

二部十一景の戯曲

配役

グロリア コルテの秘書 モニク・ドラロッシュ
メンテイ 元セールのスマン ルイ・フアラヴィニ
ヤ
スバンナ コルテの代理人 モリス・ガレル
ゴツビ コルテの傭人 シルベール・エダール
守衛 ボール・ゲイ
ジョヴァンニ・コルテ 実業家 ダニエル・イヴ
エルネル
コルテの母 ジャンヌ・エルヴィアル
マルヴェッツィ博士 コルテ家の友人 ジャン・
オゼーヌ
ルチア 女中 バスカル・アンドレ
アニタ コルテの妻 ヴイルジニー・ヴィトリ
ビヤンカ コルテの娘 ロジース・ファヴェイ
クラレッタ教授 副病院長 ビエール・デタイユ
病院の傭人 ジャン・アマドゥ

マスケリーニ 入院中の労働者 ジャック・リア

ロール

病気の女 ドニーズ・ショヴェル

肥った紳士 ボール・ゲイ

青白い顔の男 ロジエ・ベルティエ

看護婦 アマンダ・モンセラ

看護婦 バスカル・アンドレ

シユレーダ―教授 リュシアン・ユベール

病人 ジャン・アマドゥ

三階の病人 フランソワ・ペロー

看護婦 ロゼット・ツケルリ

助手たち、看護婦たち

演出 ジョルジュ・ヴィタリ

装置 ロジエ・シャンセル

装置助手 ジゼル・タナリアス

ディノ・ブツァティ

ディノ・ブツァティはイタリアの優れた小説家で、フランスでもその「韃靼人たちの砂漠」が翻訳されている。この作家のイタリアでの名声を確立したこの異常な物語をわが国の批評家たちも、当時、熱烈に歓迎した。これからお耳に入れる戯曲をヴィタリーが私のところへ持って来て翻案してくれと頼んだとき、私はそれだけのことは知っていた。戯曲を読んで見て、ブツァティがまた、大胆かつ直截な劇作家でもあることがわかった。

ただ、私は型通りに、わが国の劇界の状態から言って、この美しい戯曲がいくらかの危険を含んでいることをヴィタリーに認めさせた。しかし、彼はあっさりと、その危険が自分には興味深いと思うがあなたはどうかと問い返した。そこであとは私たちは一緒に笑い、仕事にかかるだけだった。

戯曲自体については多くを語るまい。これを一つの宿命劇とも、社会諷刺とも見ることは出来よう。そして、たし

かに、「イワン・イルリツチの死」と「クノック」をまぜ合わせれば、今日ヴィタリーの優れた劇団によって上演されるこの戯曲ほどの独創的な作品を創り出せるかも知れない。しかし、このような作品の観客には、その直接の反応という長所を残しておいたほうがよい。

それにひきかえ、翻案については二、三述べたほうがよからう。今日イタリアの友人たちが創り出すものすべてには、ある雅量、熱い心、生き生きした単純さがある。それはフランスの作品にはいささか欠けているものである。シローネ、モラヴィア、ヴィットリーニの名をあげれば私の言わんとするところはわかって貰えよう。イタリア人たちは、カフカやドストエフスキーが彼らを導く狭き門をくぐる時でさえ、彼らの肉体の重みを忘れない。そして、彼らの暗黒さえも光り輝いている。私は、同時に悲劇的でも日常的でもあるこの単純さをブツァティのこの戯曲に見出し、翻案者として、それに奉仕しようと試みた。私は彼の言語の一見なげやりだが計算されたところを、外面的な華やかさの蔑視を忠実に写した。そして、それ以外には、上演される舞台に合わせなければならぬ時のほかは、ほとんど手を加えなかった。もちろん、この段階ではヴィタリーと彼の俳優たちの協力が決定的だった。いずれにしろ、

はつきりさせておいた方がよいと思われるのは、私がいまだかつて、翻案を原作をこねまわして作り上げられた馬と考えたことは一度もないということである。ここでは、馬はディノ・ブツァティであり、私たちは皆彼が血統もよく活気に満ちていることを確信している。

ヴィタリーとその協力者たちもまさに、ディノ・ブツァティがフランスで歓迎されるようにと願ったのであり、そのために適当なやり方、つまり、彼の作品に誠実に奉仕し、パリの観客にはじめて彼があらわれる時、その前で姿を消すようつとめているのである。

A・C

第一期

第一景

コルテ・テル不動産会社の応接室と社長室。両方の部屋にそれぞれ電話。応接室にはタイプライターとテープレコーダー。応接室の三つのドアは、一つは社長室に、第二のは別の部屋に、第三のは階段に通じている。

幕開きには、社長室には誰もいない。元セールスマンのメンティが応接室に坐っている。待っているのである。

声（テープレコーダーから出ている）競合となる、点。所轄当局も事実市場の現況が……（咳の音）市場の現況が貴下が表示された期日、括弧開く、来たる十二月三十一日、括弧閉じる、に至るまで維持されることはほとんどあり得ないと予測しております、点。原料の大量入荷はもはや防ぎ得ず、……いや訂正……上記のごとき……（咳）障害に……ええと！……突き当ることもなく……

グロリアが入って来て器械を止める。彼女は溜息をつく。

グロリア あら！（彼女は、相変らず坐って待っている元セールスマンのメンティを見る）まだお待ちですの？ 辛抱強い方。メンティ ええ。暇はもてあましてますからね、今じゃあ。グロリア さっきも申し上げましたように、コルテさんがローマからお戻りかどうかわかりませんのよ。

メンティ コルテさんとは約束したことなんて一度もなかった、それでも毎日会えましたからね。

グロリアは再びテープレコーダーをかけ、タイプを打ちはじめ。

声（テープレコーダーから）……行をかえて……情勢がもし、いや……訂正する。第七項の諸処置、括弧開く、去る二月三日の同意書参照のこと、括弧閉じる、の効力は維持しつつ、ちよつとこの日付はたしかめておいてくれないか……

グロリアは用紙をタイプライターから抜き取り、テープレコーダーを止め、あちこちの抽出しの中を探し始める。

グロリア どこかしら、カーボン紙は？

メンティ（立ち上って、抽出しの一つを開きに行く）ほら、こ

ことですよ。

グロリア (いくらかそっけなく) あなた、この方ですか？

メンティ まあね。十六年間といえば、ちょっとしたもんですからな。

グロリア 十六年間？ それなら、何をお待ちなんですか？

メンティ わたしはメンティって言うんですがね。このセールスをやってましてね、だが、もうそれもおしまい。(自分の両足を示して)ペダルがさびついちゃったんですよ。

関節炎という奴だね。もう年ですわ。年とれば隠居する。隠居するには暇をとらなくっちゃあね。そこでわたしはまさにおいとまごいに来たんですよ。コルテさんはわたしを可愛がってくれましてね。あの人は金持だが、情もあるからね。

電話が鳴る。

グロリア はい、コルテ・デル不動産商会です。いいえ、社長は不在です。……はつきりわかりません……はあ、たぶん……たぶん、今朝は戻ると思いますが……はあ？ ラヴィッタ様……長いエル？ はい、書きとめました……どうも失礼いたしました。

コルテの代理人スパンナがさっと入って来る。

スパンナ 社長かね？

グロリア いいえ、ラヴィッタさんとかいう方です。

スパンナ (いらいらして) チューリッヒの連中が堪忍袋の緒を切らしかけてる。(メンティに) やあ、ルイジ……なんて返事すりゃあいいんだ、連中に？

彼は出て行く。

メンティ お嬢さんは新顔ですな。

グロリア 二日前からですわ。前の秘書はくびになったんですってね。それで、スパンナさんに呼ばれたの。

メンティ すると、まだあなたはコルテさんを知らんというわけだ、そうでしょ？

グロリア ええ、声だけしか。声は感じがいいわ。ちょっときびしいかしら。お目にかかったら、どきどきしそう。あの、失礼して、仕事をづけけます。

テーブルコーダーをふたたびかける。

声 (テーブルコーダーから) ……情勢がもし、いや……訂正する。第七項の諸処置、括弧開く、去る二月三日の……

ゴッピが入って来て、テーブルの上に革の鞆を投げ出す。

ゴッピ 皆さん、こんにちは。(グロリアに) 着きましたかね？(グロリアはテープレコーダーを止める) おや、ここはいつ来ても新顔だね。はじめまして、お嬢さん。ほほう！(彼はグロリアの目を指さす) それはあなたのですか？

グロリア えっ、なにが？

ゴッピ その目だよ！ 大事になさいよ、とにかく。大事にね、昼も夜も。すごいや。(感嘆のしるしに指を鳴らす) お名前は？

グロリア 名前？

ゴッピ そう、あなたの名前！ 姓じゃあなく、名のほう。名前のほうが未来を感じさせるからね。

グロリア (冷淡に) 御用はなんでしょう？

ゴッピ いろいろとね。怒っちゃあいけないな。わたしはゴッピ・マリオ、家屋のほうのセールスをやってるんですよ。なんて暑さだ！

グロリア 社長をお待ちですの？

ゴッピ お見通しだね、お見事。(メンティに) ルイジ、コーヒーを持ってきてくれないか。(メンティは黙っている) おい、聞えないのか。ルイジ、コーヒーを持って来いって言って

るんだ。

メンティ いやです、ゴッピさん。

ゴッピ (きっぱりと) つまり、革命だな。

メンティ わたしはもうこの会社のものじゃありません。暇をもらったんです。お気の毒ですがね、ゴッピさんには！ つまり……コーヒーのことですがね。

スパンナがさっと、別の部屋から入って来る。

スパンナ まだかね？ 電話もないかね？

グロリア いいえ、スパンナさん。

スパンナ あっちは鳴りっぱなしだというのに。なんて言ってやったらいんだ。全く、なんて言ってやったら。

電話が鳴る。グロリアが受話器を取る。

グロリア ええ、コルテ・デル不動産商会です。いいえ、今おりません……はあ、わたくしども待っておりますのですが……はい、今朝です。あの、どちら様でしょうか？……はい、かしこまりました。いいえ、こちらこそ……

一人の女が静かに入って来て、戸口で立ち止る。グロリア、メンティ、ゴッピがふりかえって、女を見る。

グロリア なにか御用でしょうか？

未知の女 いらっしゃいませんのね。まだお戻りじゃありませんのね。

グロリア 誰が？ 社長ですか？ ええ、まだ。

未知の女 いえ、いいんです、大したことじゃありませんから。構いませんわ。それにいそぐことじゃありませんもの。

グロリア お言伝おことづていたしましょうか？

未知の女 いえ、機会はいくらもありますから。でもないものもたくさんありますのにね。

女は笑いながら出て行く。

ゴッピ (メンティに) なんだ、あの気遣いは。

メンティ 見たこともない！ さっと寄付金集めだ。慈善事業って顔ですよ。

ゴッピ どういう意味だ、あの『ないものもたくさんある』ってのは？ 厭いやだね、ああいうのは！ わたしは、大嫌いだよ、ああいうのは。

門番 (制帽を片手にして、入って来て) 失礼します。女の方をお見かけになりませんでしたか、なにかこう、尼さんみたいな、それとも看護婦さんみたいななりでしたが？

ゴッピ 今来て、出て行ったよ。

門番 出て行った？ でも、出て行くところは見ませんでしたよ！

ゴッピ まだ階段かも知れないな。だが、なぜさ？ あの女、さては置おき引か、そうだろうと思った。

門番 はじめての顔です。でも、コルテさんに怒られますから。

コルテが童巻のような勢いで入って来る。みな立ち上る。門番は出て行く。すぐにスパンナがあらわれる。

コルテ やあ、やあ。(腕時計を見る) 一時間の遅刻か！ やあ、ゴッピ。(グロリアに) 新しい秘書だね？

グロリア はい、一昨日から。

スパンナ 御存知のように、アデルさんは……

コルテ わかっている、もう電話で聞いた。(メンティを認めて) おう、ルイジ、じゃあ、出て行くか？ (コルテは返事を待たずに社長室に通る) ルイジ、入りたまえ、さあ。(鞆から書類を出す) これで休めるってわけか、運のいい奴だ！

ほかの一同も社長室へついて入る。

メンティ もうこれ以上だめでした、コルテさん。(自分の

両足を指して、ペダルを踏めないんでね!

コルテ そう、休まなくっちゃあな。休むこと、こいつはみんなに必要なんだが。年がら年中働きづめだ、どこもかしこも、全速力でな! よくないな、これは。お嬢さんお名前は?

グロリア グロリア。グロリア・ベルティネルリです。

コルテ (非常に気にして) それで、ヘスタンから電話はなかったかね?

グロリア その件はノートにありません。それとは別に電話がありました、ええと……ラヴィッタさんという方です。

コルテ あわてているな、奴さん! もう一度かかったら、書きとめて、いいかね、承知したと伝えたまえ。ただし、最初の供給に関してだ。それ以上はだめだ。それから、ジェロニーに電話する。

グロリア ジェロニー?

コルテ そうか、あんたにはわからんわけだ。(うなじに片手を当てる) ええと、なんだったかな、うん、そうだ。市役所の技術課に電話して、彼との約束をきめておいてくれたまえ、明日会いたいとね。造船の件だと……ただし、明日だ、それより遅くはないかん。そこでと、家内にかけて

くれたまえ。どうだ、ゴッビ、ボローニユのほうは?

ゴッビ まだ何一つ契約できません。連中は決心するのをこわがってましてね。毎日、新しい口実をつくり出してます。本当のところは話をこわしたいんでしょう。

コルテ こわす! 冗談じゃあない。連中をねじふせてやる。それで、マキシム管は?

ゴッビ 設置してます。ただ、二日前から雨で仕事が止ってますが。

グロリア お嬢様です。奥様はおでかけだそうです。

コルテ ああ、お前か、ビヤンカ? ああ、今帰った。義理の母さんはどうしたね? なんだ? 義理なんて言うなっ? なるほど、しゅうとを持ったような気がするか。不愉快かね。うれしいよ、そういつてくれると、アニタにもわたしにも。よしよし。だがね、いいかい、わたしは板ばさみだよ、義理のお母さんと言えはお前が年寄りあつかいするという。ただのお母さんと言え、今度はアニタがわあわあいう。(笑う) 全く女つてのは! まあいい。アニタにわたしの帰ったことを伝えといてくれ! ああ、万事好調だ。じゃ、あとでな。

スパンナ 失礼ですが、もう二時間も前からチュエリッヒが呼びつづけです。大至急返事をしろと言うんですが。

コルテ (うなじに片手をあて) チューリッヒ?……ああ、そうか。

メンティ ジャあ、社長、わたしはこれで……

コルテ まあ待てよ。スパンナ、なんだっけな?

スパンナ 連中は一種の最後通牒(さいごつうめう)のつもりです。それだけです。新しい条件は御存知でしょう。フランガンが連中に

加わりました。それで勢い込んでいます。

コルテ よし。わたしの留守を利用したわけだ。やらしておけ。

スパンナ しかし、今になって承知するのは馬鹿げていますよ。実際には、連中はうちを除けものにしようというんですから。表面はいんぎんですが。

コルテ (ほんやりして) 除けものだって?

遠くから声が聞える。四句節の説教のような抑揚で、わけのわからない言葉を叫ぶ女の声のようである。コルテはそれを聞いている。

コルテ あれはなんだ?

スパンナ はあ?

コルテ 聞えないかね、あの叫び声。

スパンナ なにも聞えませんが。

コルテ なにも聞えないって? (耳をそばだてる。だが声は消えている) どこまで話したっけな?

スパンナ とにかく、返事だけはしませんと。

メンティ 社長、これでもうおいとまというやつを。

コルテ (彼に待つように合図して) よし。どうするかわかるかね、君には?

スパンナ 延期ですか? わたしもそれを考えました。しかし、連中は……

コルテ 誰が延期なんて言ったかね? 電話したまえ、いや、電報だ。そのほうが効果がある。

スパンナ きっぱりとノーですか?

コルテ きっぱりとイエスだよ。無条件のイエスさ。われわれの企画の成功を祈ると付け加えたまえ。

スパンナ しかし、社長、わかりませんね。まさか冗談じゃあ。それじゃ、自分で自分の首をしめるようなもんです。

こちらはともも持ちこたえられないんですから……

コルテ わかつてるよ。だがね、君が連中だとして、電報を受け取ったらどうだね。一体どう考えるかね。

スパンナ 失礼ですが、あの偉大なコルテ氏もついに気が違ったと思うでしょうね。

コルテ (笑いながら) いいや、そういうことは信じたがらな